

(2011年3月29日、コロンビア大学ミラー・シアターにおけるコンサートの前置き)

バーバラ・ルーシュ：コロンビア大学名誉教授：中世日本研究所所長

日本の聖なる宮廷音楽と古代の音風景の再生

日本伝統音楽遺産の輝き

カーネギーホールと中世日本研究所がパートナーを組んで「ジャパン・ニューヨーク・フェスティバル (Japan NYC Festival)」の春の部を計画しておりました時、いったいわれわれの誰が、歴史に残るような壊滅的な地震・大津波に日本が襲われると想像しましたことでしょうか。3月11日以来、この18日間、テレビは恐ろしい映像を映し出しておりましたし、新聞は心が痛む悲しい記事を載せていました。何万という人たちの尊い命が一瞬にして失われてしまい、同時に何十万という人たちの人生が一瞬の間にして崩壊してしまいました。いつもこの大災害について考えざるを得ませんし、心の中でこの大惨事をどういうふうに整理してよいのか、われわれすべてにとりましてきわめて難しい時期でありました。さらに、この心痛を倍加させましたのは、大津波が引き起こした福島第一原子力発電所の大惨事でありました。このような時、日本の方々が大勢苦しんでおられる時に、はたして今夜のような祝典は相応しいのでしょうか。

しかし、考えてみますと、今夜、皆様方とともに日本の神聖で最も古い音楽である雅楽に耳を傾けますことは、日本人の復興能力、その社会性の高さ、あるいはその活力や忍耐力に満ちた文化に対する最も大きな敬愛に念を表し、そしてこの古の音風景の中で日本の「再生」を喜びあうことになるのではないかと、私には思えてなりません。

雅楽は日本の音楽文化の中でも極めて高レベルの存在であると同時に、日本人の耐久性や柔軟性を示す金字塔でもあります。過去数千年の戦乱に満ちた歴史のなかで彼らは、この音楽に関心を示し育て上げ、そして次世代へ渡すために何千年も繰り返し努力してきました。

よく強調されますのは、日本の雅楽は世界で最も古くから続くオーケストラ音楽であるということです。これはその通りであり、母なる地球のどこを探しても現存する古い交響乐的音楽であります。しかし、他の交響曲同様、その音楽自体は時間の経過とともに変化してい

ったにもかかわらず、アジア大陸から奈良へ、奈良から京都へ、そしてその後、外国へと伝えられてゆく中で、新鮮さを保ち、現在でもその創造性を失っていないように見えます。

20世紀初期に世界的に活躍した、コロンビア大学の作曲家のヘンリー・コーウェル（Henry Cowell）によると、雅楽は彼にとって、いままで耳にした音楽の中で最もアバンギャルド音楽であるといっています。1500年前、ペルシャ近郊からチベット、タイを経て中国、朝鮮半島を通って行きましたが、どの国、どの民族においてもこの音楽は新鮮な響きをもって迎えられました。そして最後の、行き止まりの地、日本に伝えられた時も、それは確かにアバンギャルド音楽でした。日本人はこれを天から受け取った聖なる秘薬のように重宝しました。その後、幾世紀を経るうちに発祥の地においてその伝統が消滅し楽器も廃れてしまいましたが、日本では古来の歌やダンスとともに独特な雅楽音楽が生まれてゆきました。もちろん、日本でもいくつかの楽器は姿を消していきましたが、9世紀から10世紀にかけての宮廷のなかで何人かの素晴らしい才能をもった人たちが現れ、いくつかの楽器が特に好まれるようになり、また新しい曲も生み出してゆきました。その結果、細い蜘蛛の糸で編まれたような世俗的な衣が従来の音楽のもつ宗教的な部分に覆いかぶせられたような曲もできてゆきました。

中世に入ると、打ち続く戦乱によって代々続く雅楽演奏家のなかには宮廷から去る人たちが出てきました。奈良や大阪の社寺がそうした人たちを保護し、それぞれの地域の守り神やコミュニティが必要とするものを満たすように育成され、新しくなりましたが、雅楽の根本や永遠性は不変のままであり続けました。

19世紀、西洋との出会いによって、日本は開国につながる、決定的な衝撃を受けることになりました。西洋から外国人たちが大勢やってきて、日本人に対して、世界的に極めて高度な文化や厳格な社会制度を発達させた国が世界の歩みから取り残されていることを悟らせたのであります。西洋人は日本人に対して、洋服に着替え、髪形も変え、調度品も変え、音楽やその他も変えないかぎり、一人前の市民と見なされないだろうという態度を取りました。唯一そうすることでのみ日本人は世界の一員と見なされるだろう、ということでありました。これはほんの120年ほど前のことで、その頃、ピアノやバイオリンのような不思議な感情を刺激する楽器が「世界の真なる音楽」として日本に持ち込まれました。

特段、驚くことではありませんが、日本政府はこれに同調しました。教育政策に携わる役人たちも、鬚を切り西洋風の髭を生やし洋服を着用しました。その様は、まさしく1891年、新しく開演したカーネギーホールを祝うガラコンサートに出席した時のチャイコフスキーの写真そっくりであります。これらの役人たちによりますと、バイオリンやピアノは笙や竜笛や箏より

文化的に優れているとの見解を表明していました。ということは、すなわち、学校ではこれらの西洋楽器が教えられるべきであり、自国の楽器は追放されることになりました。それは、ペリー総督の軍艦が与えた影響と同じくらいのものでありました。

当然のことではありますが、若い日本の若者は自分たちを魅了した西洋音楽を学ぶために先を争って外国へ出かけました。こうしたなか、西洋人たちは冷たくほほ笑みながら日本人たちの行動に懐疑的でありました。太平洋の小島に位置し、何百年も外部との交渉を断ってきた日本が、演奏技術を習得し、モーツァルト、ベートーベン、ブラームス等の音楽の深さを理解し、彼らの音楽を微妙なニュアンスで表現できるのだろうか。彼らは、単にしぐさをまねするだけにすぎない、と思いました。

ああ、と私は嘆きたい気持ちです。本日、このカーネギーホールジャパン・ニューヨーク・フェスティバルにわれわれの祖先である、19世紀の人たちが出席していたなら、いかに自分たちが間違っていたかを悟ることになるだろうと思います。われわれは、今月のカーネギーホールの音楽プログラムによって感嘆させられるに違いありません。このプログラムを見れば、今日の西洋音楽において世界的に優れた才能は日本においても生まれ育成されていることがはっきりわかると思います。日本における西洋音楽教育の始まりは100年を少し上回った程度であるにもかかわらず、あります。

時代は変わり、21世紀になって、コロンビア大学において学生たちに日本の伝統音楽の素晴らしい楽器を教えるための資金を調達しようと努力する中、今度は次のような日本人の声が聞かれます。現代におけるアメリカの若者たちが置かれている音楽環境は、過剰なまでの性的表現に満ちていると同時に、露出症的な耳障りな音に満ちた音楽世界にどっぷりつかっている。そのような状況において雅楽の奥深さはわかるわけがない。さらに前もって指定され完全に調整された、既成の音しか出せないように設計された鍵盤や弁の操作による楽器を演奏している。そんなアメリカ人がいかにして、ほぼ自然のままともいえる竹や絹を使ったアジアの響きをもつ楽器を操り、日本の伝統音楽の名曲を演奏するのに必要なテクニックを習得できるのでしょうか。指の運用、また頭、唇、横隔膜の微妙な抑揚だけで要求される音色を出すことが可能なのでしょうか。それも西洋人が！ 彼らは正式の正座の仕方も知らない、といわれています。

今、私は、こういう態度がいずれ消滅することを信じなければなりません。

有難いことに今日の日本では、西洋音楽だけを「音楽」と見なすような、時代遅れの人たちはどんどんいなくなり、音楽を真に愛する心から、オープンで自由な態度で雅楽に接するようになりました。実際のところ、ここ10年から20年ほど、中学生、高校生、大学生、それに20代、30代の若者たちのなかで雅楽や邦楽に夢中になる者の数が増え、地方でも雅楽オーケストラや邦楽アンサンブルが次々と誕生し、さらに全国紙も出回るようになった。古い世代の、いわゆる西洋派の日本人は、この新しい現象をほとんど意識していないように思います。

日米両国において喜ばしいと思われることは、今や日本の音楽状況が世界中で最もダイナミックな要素に満ちたものの一つであること、さらにそれが東洋と西洋の、素晴らしい伝統に裏付けされた専門性をもっていることでもあります。

今夜、演奏家の方々を舞台に迎える前に、これから聴く雅楽について少しだけ説明しておきたいと思います。われわれは多くの時間をかけて、それぞれの曲目についてわかりやすい説明（配布したプログラムの16ページ以降）を心がけました。しかし、初めて西洋音楽と違う音楽に接する場合、簡単にこの障壁を乗り越えられないと思いますが、それでも地図付きの案内書は役立つに違いないと考えられます。

まず、雅楽を理解するための第一歩ともいうべきもの、そしてそれを知ることは、雅楽が古典音楽のレパートリーとして生き残ってきた最大の理由の一つを知ることでもあるが、雅楽はわれわれ人間たちの娯楽のための音楽でないということです。よく知られていますように、どんな娯楽にせよ、われわれは流行に左右されがちであります。西洋における娯楽としての音楽につきましても、たえず、はやりすたりがありました。もちろん時代によって異なりますが、西洋では音楽は主にわれわれの情緒的な、あるいは感情的な世界に大きな影響力をもったものと認識され、時にはわれわれの心を興奮させるものとして、また慰めてくれるものとして鑑賞されてきました。

これに対して雅楽は、感情的で情緒的な世界と密接な関係をもちません。この意味において西洋音楽とはいろいろな面において異なる。雅楽はわれわれの感情を揺り動かしたり、慰めたりするための音楽ではありません。雅楽の演奏者は、古典雅楽のレパートリーを演奏する時、いわゆるエンターテイナーではなく、儀式における祈願者でもあります。儀式の参加者であり、聖なるものとわれわれをつなぐ伝達者でもあります。つまり、雅楽演奏者によって奏でられる音楽を通して聖なる宇宙的なパワーに接触しようとしているのであり、地球とそれを超えた世界、そしてその世界の住人である神々との触れ合いなのであります。

この音楽の聞き手は、心が穏やかになると同時に、洗われたような気持ちになり、異なった次元へと運ばれます。それに対して、情緒的で感情的なものを強調する傾向にある西洋音楽とは、異なります。雅楽はゆっくりと、われわれの情緒的・感情的な世界の結び目のもつれを解き、複雑な人間関係の問題から解き放ってくれます。

はじめて西洋人が古典雅楽に接する時、ちょっとした戸惑いを感じると思われます。まず、指揮者がいません。それに加えて、われわれが幼いころから慣れ親しんできました、西洋音楽に基本的な三つの要素、メロディー、リズム、ハーモニーがはっきり見えてこないことがあります。古典雅楽オーケストラは、ユニゾン（斉奏）で演奏されますが、それは自然に存在しない、人工的ともいえるハーモニーのような和声法的な音作りを避けようとするからであります。雅楽ではその代わりに、自然の「音風景」をまねる音の集合が奏でられます。もしそのユニゾンを一つの大きな河の流れとたとえるなら、各々の楽器は別々の流れ、あるいは小川のようなもので、主流の中でそれぞれの小さな流れが波打ちながら、分離することなく全体をかたち作っているというわけです。

今夜の、簡単な説明を終える前に、雅楽に見られるもう一つの独特の特徴について説明したいと思います。雅楽の作品を演奏する前に、奏者は「音取り」という各楽器の音によって作られる雰囲気を整えるために2、3分間演奏します。これは、西洋の交響曲を演奏する前に行われる通常の音合わせではありません。「音取り」には全部で六つの調子がありますが、「音取り」によって、演奏者の方々は各自の呼吸を合わせ、テンポを同じようにして、次に演奏する曲の特定の調子と季節的色彩を示すことができます。「音取り」の意味として、それぞれの演者が演奏をオーケストラの中で共有することで、一つのオーラを作りだし、人々と自然と神々の世界とを結びつける、という説明も可能かもしれません。

「音取り」というやや専門的なことについて触れましたのは、今夜の演奏会でプログラム通りの演奏ができない事情について説明する必要性が生じたからであります。プログラムでは古典雅楽の傑作、「越天楽」が前述のジャパン・ニューヨーク・フェスティバルの祝賀として、お目出度い「平調（ひょうじょう）の音取り」で演奏される予定でありました。よく結婚式や学校等の祝賀行事等で本曲が演奏されるのはこの理由によりますが、「越天楽」は古くから形式的には非常な柔軟性をもっており、別の調で、つまり「盤渉調（ばんしきちょう）の音取り」で演奏されますと、レクイエムのような意味をもつようになり、お葬式などで演奏されます。

今夜は、まず、長年、コロンビア大学の雅楽プログラムを指導し、今夜のために東京から来られた三名の雅楽演奏家が「盤渉調の音取り」で「越天楽」を最初に演奏します。これは、こ

の3月11日の大震災の折に遠いところへ旅立ってしまわれた家族の方々、その他親しかった人たちや行方不明者・死者への哀悼の意の表明となります。3万人以上の犠牲者への哀悼の意を表すると同時に、25万人以上の、ホームレスとなった被害者を慰めるものであります。

そんなわけで、この演奏に限って、演奏後の拍手は遠慮するようにお願いしたい。この曲が目指す、神々の住む世界に触れようとする気持ちとともに味わい体験してほしい。この曲の後には、それぞれの曲の演奏に対して自分たちの気持ちを自由に拍手でもって表明して下さいばうれしく思います。

それではこれから、珍しい楽器が奏でる音楽をたっぷり味わってほしいと思います。最初の数曲は、大昔の中央アジアから伝わり、日本で長年にわたり育て上げられてきたものであります。休憩ののち、最近の、つまり現代的な曲が演奏されますが、それらは雅楽楽器の創造的で現代的な側面を味わうのに相応しいと思います。東京およびニューヨーク在住の一流の演奏者による今夜のコンサートは、これら素晴らしい日本の楽器が奏でる独特なサウンドが長年生き残ってきたことの証明であると同時に、これらの楽器は常に新しい創造性を有していることの証でもあると思います。

今、私が申し上げましたことは、日本および日本人についてもいえることであると思います。すなわち忍耐力と創造性によって日本は、伝統を守りながら、新しいものをも生み出しながら、強く生きてゆくに違いないと思います。

ご静聴、有難うございました。